

## 新聞報道に見る1888年のバルセロナ万国博覧会 における日本の存在

The Presence of Japan in the Barcelona Universal Exposition of 1888 through the Press

マリナー・ムニョス・トルブレランカ Marina MUÑOZ TORREBLANCA

(スペイン・ポンペウ・ファブラ大学博士課程在学中)

訳 佐藤健太郎 (早稲田大学専員講師) / 坂井 宏 (スペイン史学会会員)

世界博覧会 (exposiciones mundiales) は、進歩や近代性と信じられていたものについての包括的で意識的な表象であった。しかしながらある意味で万国博覧会 (exposiciones universales) は、ある近代国家の表象の中でも重要であると信じられていたもののスナップ写真であった。この種の博覧会には、主権国の技術と発展を示す主要な展示品と並んで、様々な招待国からの展示品が集められている。つまり同じ空間の中に、最先端の産業製品と並んで、伝統的な陶器品——たとえばを一つ挙げるなら——や、場合によっては当時エキゾチックとみなされていた国から来た人々を陳列することさえ出来たのである。いずれにせよ、世界の半分を巻き込んだ両大戦前の緊迫した暴力と危機の時代にあつて、19世紀後半に行われた世界博覧会はどれも、空想と創発の場として、常に壮大なスベクタルでもあつた。

19世紀の博覧会は、普遍や近代というイデオロギが求めるものに応じて組織された。それゆえ1851年のロンドン世界博覧会の説明文には、「風が羽の生えた種子を地球上に撒き散らすように、商業は芸術や文明化、ひいては人間愛を普及させる」とうたわれたのである。これらの博覧会は世界表象のミニチュアであり、最新技術の製品の紹介から最も珍奇な品々——ほとんどは西洋が未知の国から略奪してきたもので、その大半の国は植民地だった——の展示に到るまで、起こつていく出来事の全てを証言するものだった。

バルセロナ市はこの種のイベントを二度にわたつて開催した。第一回目は1888年で、「万国博覧会」(Exposición Universal) として知られる極めて19世紀的な性格を帯びた、つまりヨーロッパで開催された初期の万国博覧会の路線を引き継ぐものであつた<sup>1</sup>。そして第二回目は、第一回目の40年後に、両大戦期間という前回は全く異なる歴史的枠組みの中で「国際博覧会」(Exposición Internacional) として開催された。名称が「ユニバーサル」から「インターナショナル」に変化していることに注意していただきたい<sup>2</sup>。

本稿は、1888年の万国博覧会に参加した帝國日本の存在を通じて、バルセロナ市が日本をどのように見ていたかを提示しようとするものである。まずは出発点として、バルセロナ市と日本の歴史的文脈を取り上げ、バルセロナの博覧会にやってきた日本の意図がどのようなものであつたかについて推察する。次に、日本の表象と日本のイデオロギを形成した展示場の建物や設

備を分析する。この分析は、数々の展示場における展示品の詳細な分類にも向けられる。以上の議論は、複雑ではあるが大いに興味の持たれる別の問題——「他者」の認識とイメージについての問題——を解くための枠組を提供することになる。その前に、まずはキム・ヌーヒーの論文のあらましを確認しておく必要がある<sup>4</sup>。彼女もまた、博覧会における日本の存在と、それが世紀末のスペイン社会に与えた反響について扱っている。彼女は主としてこの時代の文学・芸術上のジヤボニスムのテーマに焦点を当てているものの、本稿の導人として扱われており、本稿で展開する議論の一部を補うものである。

### 1. 1888年の日本とバルセロナ市

1888年のバルセロナ市は、1882年に始まる経済危機の只中で万国博覧会を開催した。それは「黄金熱」(1875-1882)と呼ばれるカタルーニヤの大ブルジョアジーのビジネスにとつては並外れた時期(植民・冶金・化学産業が発展し始めると同時に主要な電気会社や船舶会社が設立された時期であり、1881年には博覧会で自社のパビリオンを持つことになる大西洋新聞会社が設立された)が過ぎ去つた後だった。ブルジョアジーがモダニズム運動を芸術面で後押ししたおかげで、文化的には豊かな都市であった。とにもかくにも、景気後退にままわれていたとはいえ、当時のバルセロナ市がヨーロッパの首都の中でも最先端を行く重要な都市であることに変わりはなかった。そうであればこそ、この時代のスペイン産業の中心地である1888年のこの大都市の新聞報道において、帝国日本がぞんざいな扱いを受け、以下で見えるように固有の国家としてほとんど認識されておらず、他の東洋諸国家との区別がなされていないことは如何にも不可解である。とは言ふものの、博覧会における日本の存在は、万国博覧会の産業館においてそこそこの空間を占めていたので、十分に目につく程のものではあった<sup>5</sup>。

1888年頃の日出づる国は、外に向けて強かに拡大しようとする経済拡張期の只中であつた。啓蒙期にあたる明治時代(1867-1912)であり、幕府滅亡と工業化に引き続いて行われた権力構造の再編を通じて国は変質した。財務エリートが行動力のおかげで、国は近代的大国へと変貌を遂げた。自らの存在を知らしめることを望んだ日本は、万国博覧会を利用した。これと時期前に並行して、パリを芸術上の首都とする19世紀後半のヨーロッパの芸術世界は、日本の芸術に関心を持ち始めた。ジヤボニスムの名で知られるその影響のおかげで、日本の芸術作品の収集が始まった。それは芸術市場に日本の芸術作品が存在することを意味した。日本が外に向けて国を開いたことと、数々の博覧会のおかげで、日本の芸術作品や手工芸品が——常に賞が添かつたわけではないが——知られるようになった。

私は最も傑出した芸術家たちと一緒に暮らしてきたので、彼ら全員が日本の芸術に対して驚嘆の目を向けていることを知っている。公衆——彼らは様々な国際博覧会に出品されている比較的質の劣つた見本によつて開眼した——はその正当な価値をいまだに評価していない。しかし目利きの蒐集家によつて決定されたのではない統合の中に選択的に集められ

た狂騒ぎのことを知れば、その勇となることだろう。<sup>6</sup>

スペインと日本の外交関係は、1868年にいち早く通商条約を締結して以来、あまりにも希薄で限定的であつた。スペインに対する日本の関心は、基本的には近隣のスペイン植民地、とりわけフィリピン諸島にあつた。他方、日本に対するスペインの関心は、自国の植民地の安全を保障することにあつた。ルイス・エウヘニオ・デ・トゴレス<sup>7</sup>によると、1875年から1885年におけるスペインの対日外交政策の関心は、基本的には次の四点だった。すなわち、外国人の国内通行の自由をめぐる条約の再交渉、スペイン教会の宣教活動の推進と日本人キリスト教徒の人身と利害の保護、常に人手不足状態にあるスペイン植民地(ラバティとキューバ)農業のための日本人労働力の確保、そして最後に、日本がその領域に関心を増大させ始めていたマリアナ諸島とカロリン諸島に関する一連の対話を(1885年に)開始することによつていわゆる「黄禍」<sup>8</sup>——とスペイン当局は呼んだ——を封じること、である。

太平洋における日本とスペインの植民地体制についてのマリー・ドローレス・エリサルデの論文によると<sup>9</sup>、明治初期の日本は、外交政策に関して一見相反する「着払い」を追られていた。一方では、支配エリートがまず最初に開国に反対し、次に全ての外国人を追放しようとした。他方では、彼らはひとたび権力の座に就くと全く逆の立場を取つた。つまり彼らは、日本を外的脅威に立ち向かうことのできる強国にするための唯一の方法が、西洋技術の習得と西洋モデルの採用であると理解したのである。

1888年のバルセロナ万国博覧会に日本が参加した理由は、様々な要因から説明することができる。すでに述べたように、開国して貿易の交渉を決定しなければならなかつたこの時期の日本が「ユニバーサル」な射撃を持つ行事に参加し、他の近(河)家と関係を持つなどしてその影響に与ろうと望むことは理の当然であつた。これから見てゆくように、二国間の通商関係は、1868年に通商条約を締結したにもかかわらずほとんど進展していなかつたが、そのことは日本が様々な品を出展することによつて博覧会において充分な存在感を示すことを妨げるものではなかつた。そして最後に、アジアにおけるスペイン植民地の一部を希望していた日本にとつては、スペインの現状と力を知るための良い機会となつたであろう。

日本はバルセロナで開催された博覧会に二度とも参加した。とりわけ1888年の第一回目に積極的に参加したが、当時はまだバルセロナ市によつて日本は大いなる未知の国であつた。このように言うのは、当時の新聞報道が、ある場合においては東洋の諸国家の差異を明確に認識していなかつたようであり、中国と日本の区別をほとんどしていなかつたからである。バルセロナの日刊紙によつては、二つの帝国は同じ全体の一部をなしていたと思われる。このように推測されるのは、以下のような報道からである。「昨日、我が市の通りにおいて、この市にやつて来た香港出身の三人が人々の注目を引いた。彼らは博覧会で日本の展示場を設置するためにやつて来たのである。」<sup>10</sup> 誤報の可能性が最も高い。しかしバルセロナにやつて来る人々が搭乘した船の出港地と寄港地を記者が混同したという可能性もある。

経済に関する日本のニュースの出所の大半が中国在住のスペイン領事であることが、吾が處にも注意を引く。

(…) 日本。この帝國とスペインの通商は極めて少ない。我が國は361765ペセタの米とその他の商品を輸入しているだけなのである。輸出は全くない。我が國の輸出業者と生産者は、上海のスペイン領事が増えてくる短信や報告を参照すれば有益だろう。例の官僚が言うには、我が國の生産品のいくつかは、かの帝國において充分に受け入れられる余地がある。<sup>11</sup>

日本との大きな通商関係が存在しなかったという事実が、日出づる国に関する知識の少なさを浮き彫りにする<sup>12</sup>。ルイス・エウヘニオ・デ・トゴーレスによると、スペイン政府は1884年頃に17500ペセタの資金を用いて横濱に准領事館を設けようとして強く望んでいた。しかし東京の公使館長ホセ・デラバルトが、横濱直港ではスペインの商取引はほとんどなされておらず、横濱に登記されたスペインの商船は一つもないのだからと言って、出費を思いとどまらせたのである。

海外において自分たちのことがほとんど知られていないことを意識していた日本人は、初めての公的統計を発表した。日刊紙/パンデラルデアは、1888年8月21日水曜日付の大きな記事に、日出づる国に関する最も重要なデータを詳細にわたって収録した。日本について、旅行者や宣教師のフィールドを通じた報告だけでなく、日本政府が作成した「公的統計」による情報を手に入るということは、西洋的な基準からは近代性のあかしとみなせるだろう。

この広大な帝國の経済情勢、前工業前から見た現状、(…) 人口、統計 (…)<sup>13</sup> は、今日に到るまで公的記録の対象とはならず、有効利用されるべき統計の対象にもならなかった。そのことが原因で、日本は信頼性の低い旅行者の記述だけによって、極めて不十分に知られているに過ぎなかったのである。しかしついに日本政府は自国の統計を初めて公けにした。繰り返すが、これは正確かつ公的なたちでヨーロッパに伝えられた初めての統計であり、様々な興味深いデータを含んでいるのである。(…) 目を引く事実として、男性が人口の半数を大きく上回ること、日本では離婚の頻度がヨーロッパのいかなる国よりも低いことに触れなければならないだろう。その統計によると、離婚は年に平均して116074件にも及ぶ。これは住民の約3%にあたるのである。(…)<sup>14</sup>

それにもかかわらず、万国博覧会の開催された年に新聞で報じられたニュースは、日本列島の海図の変更を告げる通知<sup>15</sup>や横濱での噴火を伝えるロンドン発の通信<sup>16</sup>といったように、内容は様々だったものの、目的には乏しかった。とは言いなながらも、日本社会の近代化を報じるニュースが徐々に増えていった。ラ・パンダラルデアは、日本の学者が地盤研究において最先端を行っていると読者に伝えている。日本の近代化を伝える別のニュースでは、新聞の見解によると、

日本はヨーロッパの習慣——当然これは「文明化」とみなされるもの——に適応しているのである。

知られているように、帝國日本は日々熱狂的にヨーロッパ文明の習慣と規則を採用している。この最も発展した帝國が採用した我が文明の表出の一つが新聞の発行であり、日本政府はこれを統制するための新しい法律を推布したところである。(…)<sup>16</sup>

「公的」訪問団の存在を報じるニュースはそれに劣らず注目される。最初のニュースが報じられたのは、博覧会において国を代表することになる日本の使節団が横濱を出発した2月のことである<sup>17</sup>。一ヵ月後のバルセロナ到着が次のように報じられている。

昨日の午前10時、リヨンの日本領事がこの市に到着した。彼は博覧会におけるかの東洋國家の使節団に加わっている。この紳士は、総監ドン・ギリエルモ・マリーア・レメデアオスや二人の日本人官吏とともにカタルーニヤの旅館に宿泊した。(…) 日本使節団は推薦状を携えて我が國の高級官庁にやって来た。<sup>18</sup>

次に、博覧会における日本の存在を「物質面で表裏」していたものは何であったのか、この機会にどのような種類の展示場が設置されたのか、そしてそこにおいてどのような種類の品々が展示されたのかについて見ることにする。

## 2. 1888年の万国博覧会における日本の展示場

1888年のバルセロナ万国博覧会の会場は三つの大きな区域に分かれていた。訪問客はそれらの区域において、コンクールの雑多な現実を見出したであろう。メインの空間は、サン・フアン通りにこの機会のために作られた凱旋門と、通りの終点にあるプリム将軍像を結ぶ軸の両脇に広がっていた【図1】。通りと交差する数多くの軸の部分に数多くの展示場が設けられた。美術館、科学館、建築館、遊藝館、カフェ・レストラン、温室、マルトレイ博物館、日よけ棚、モデル教会、機械列場、産業館等々。

会場の末端に位置するのが海洋セクションと呼ばれる第二区域である。ここに行くためには、産業館の背後に敷設された金属製の橋を渡らなければならない。この区域は海の手前で終わっており、そこには浜辺の椰子の木通りと海に突き出した埠頭があった。ここに造船館と太平洋横断会社パベリオソ【図2】、音楽堂、カフェ・レストランが建築された。

第三区域は、シウダデーラ公園の池の横と周りに位置し、曲がりくねった道が続き、花壇が多く、様々な建築物からなっている。この区域には数々のパベリオソとジュゼップ・フォンセラの記念噴水がある<sup>19</sup>。この手狭な区域にある展示場は、単なるあずま屋程度の小さいものであり、色も形も多額多様であった。ジェットコースターの近くのこの区域は、博覧会の中でもひと



図1 1888年のバルセローナ万国博覧会。遊樂園から見た博覧会場の一部の眺め。Barcelona, cent anys de Arts, 1888-1988, Barcelona: Fira de Barcelona, 1988.

わ目立つ区域であった。建築物のタイイもまた多岐多岐であった。フイリピン館では現地人がタバコの製造過程を裏映していた【図3】。パレンシアのオルチャタ屋では、給仕がパレンシア独特の服を着て、他でもない飲み物——トルコ・コーヒー——を出していた。ビール屋ガンゾリヌスでは……。そして博覧会のオアシシャル・ソツアに45番と記載されているのが日本の小さな展示場である。

それは小さな仮設の建物であった。おそらくそのため、本稿が依拠する日刊紙ラ・パンダアルデアには記載されていない。対照的に、風刺雑誌の「ラ・エスケーリヤ・タ・トラツチヤ」が特集した博覧会に関する一連の記事には、この小さな建物のスケッチ【図4】が次のような説明とともに掲載されている。

色彩の施された紙製の提灯によって飾りつけられ、武士の身なりをした人形が見張りをしている日本人の美しい木製小屋には、かの逆回の特産品を贈りしようとする人々がひっきりなしに訪れている。<sup>20</sup>

別の言及を、文芸評論家J・インサルトの「昨年」と題する本の中に見つけることができる<sup>21</sup>。彼は日本の展示場について次のように詳述している。

(…) また湖のほとりにある日本の小屋の特徴は、良く知られたその様式よりも、興興で建物を組み立てる彼らに固有の器用さのモデルの方にある。彼らは、とりわけ竹と杜松を自然の状態のまま使い、それを裁断して組合わせ、繊細な彫刻を施し、パビリオンの粗立と解体を素早く行い、全ての部品を用いて……<sup>22</sup>

いずれにせよ、初めての日本の表象が取壊し可能

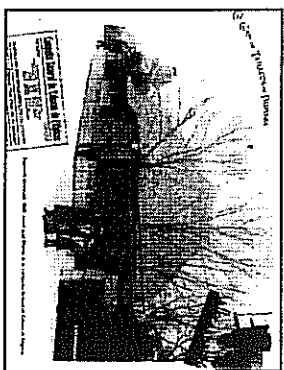


図2 1888年のバルセローナ万国博覧会。海洋セクションにあるアラゾ島の大西洋帆船会社パビリオン。Barcelona, cent anys de Arts, 1888-1988, Barcelona: Fira de Barcelona, 1988.

な木製小屋であり、そこでは商品販売が行われていたことが明らかとなる。この展示場については少し後に再び触れることにする。

日本はこの他にも産業館の中に別の展示場を持っていった。この大きな半円形のパビリオンは博覧会の中でも最も重要なものの一つであり、内部には24のギヤラリーが半円の内側に並び、並んでいた。各国のギヤラリーは半円の内側から放射状に伸びており、異なる分野の製品が同心円状に展示されている。つまり円の内側から放射状方向に歩くと、ある一つの国の製品の全体を見ることができ、同心円方向に歩くと、ある一つの製品を見ながら世界一周が出来るようになってくるのである（放射状方向の端が半円を切り抜くように伸びている）。しかし、見したところ、この館の配列——1867年のパリ万国博覧会ですでに採用されていて、何らかの教育的意味合いを持っていた——は達成されなかった。実際に完成したものは、大いに秩序を欠いていた。木綿服の生地となり眼鏡屋の道具が置かれ、整形外科の用具のとなりにはピアノが置かれ、奇想天外な品々となり外科の用具が置かれ、天井・天蓋から吊るされた旗は……といった具合であった。建築家シャビエ・フアラガがジュゼップ・インサルトの時代の次のような記事を引いているのは、このような意味においてであった。「スペイン館の中では、展示場が無より前に、そして全の上に（*lunas que nada y por encima de todo*) 見える。」<sup>23</sup> 並べられた大量の品々が無秩序に展示されているために展示品がよく見えない状態を、彼はこのように説明しているのである。

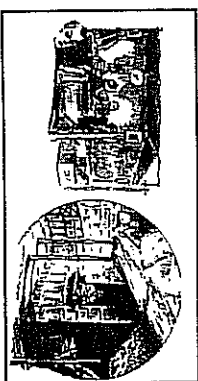


図4 「博覧会めぐり、パビリオン」。La sequella de la Torrença, Barcelona, 13 octubre de 1888.

産業館では——このパビリオンは「ユニバーサル」な射程（博覧会の特徴を思い起こしていただきたい）を持つものではあるが——展示品の大半はカタルーニヤ産業と関係があった。それは産業館の25棟の配分からも明らかである。それらのうちの7つがバルセローナ、テラツサ、サパテル<sup>24</sup>の出席者によって占められ、その総面積は9800m<sup>2</sup>になった。ジローナ県はおよそ1000m<sup>2</sup>を占めた。その他のスペイン諸地域が占めた合計面積は約3000m<sup>2</sup>であった。スペイン政府は4000m<sup>2</sup>を占める最大のギヤラリーを持ち、そこに皆肝ごとに分類された品々を展示した。フランスとその植民地が6600m<sup>2</sup>、オーストリア・ハンガリーが3000m<sup>2</sup>、ポルトガルは象徴的な意味しか持たないたつた22m<sup>2</sup>であった。続いてドイツ、アメリカ、合衆国、ロシア、ベルギー、そして控えめな面積を占めるのが中国、日本、トルコ、スイス、スウェーデン、オランダ、デンマーク、アメリカの共和国エカテドール、ポリビア、ホンチユラス、アルゼンチンであった。

パビリオン内部における日本の存在は、他国に比すれば取るに足らないものであったにもかかわらず、当時の新聞によって幾度か報道されている。たとえば展示場が完成したときには、「産業館における日本のセクションはすでに完成し、公衆の拝観が可能になっている。」<sup>25</sup> あるいは重要人物が訪れたときには、「陛下【ハプスブルク・ローヌのマリア・クリスティーナ妃】は中国、ウルグアイ、日本、ベルギー、フランスのセクションを訪れ、芸術的に最も優れた展示場の最も

珍しい製品の前で足を止められた。」<sup>26</sup>そして当時の評論家フェデリコ・ラオラ<sup>27</sup>が展示会の最も重要な部分を以下のように描き出している。

最初の棚に入ると全てを注意深く精査する。日本の大型の花瓶、華麗な陶磁器、完成に一万四千日を要した中国帆船（ある中国人がそのように言っていたが、そんなにかかるものか私にはわからない）、大理石の熊手、そして其珠を嵌め込んだ黒檀製の瀟灑な便掛。<sup>28</sup>

産業館の日本の展示場は「燦の棚に置まれ、棚には前面の広い方と側面に二つの入り口があり、入り口は何方とも木製の小さな格子によって閉じられており」<sup>29</sup>、格子の周囲には博覧会に運んできた品々を展示するための陳列棚があつた。

(…) このガラス製の二つの陳列棚のうちの一つには、高価な織物と見事な刺繍が施された絹製の衣服が陳列されており、もう一つには、繊細に仕上げられた漆や陶芸や木製の小品が数多く陳列されている。展示場の中央には、むき出しの陳列棚が五つある。そのうち二つはセクションに沿つて能方向に延びた階段状になつてゐる。その真中には二つの小さな棚がある。そこに据えられた彫形に影刻された青銅製の二つの大きな像は、船部にこだわわる日本の職人に特有の仕事であり、芸術性の高さを備えている。奥には見事な刺繍が施された垂れ幕をつけた四角い小さなパビリオンがあり、そこには大理石や様々な金属を贅沢に埋め込んだ額縁などの最も素晴らしい芸術品が展示されている。このパビリオンを囲む小さな陳列台だけでも、漆とふんだんな象嵌によって製本された十の見事なアルバムが並べられている。そのアルバムには、日本の様々な景色、村落、建築物の光彩陸離たる風景写真が何枚も収められている。<sup>30</sup>

当時の権誌「イラストで見えるスペインとアメリカ」には、産業館の建物の彫画【図6】とともに、それを説明する記事が掲載されている。

博覧会において日本が自分たちの国を表象するものとして展示した——それゆゑ展示に値する選りすぐりの——品々、あるいは「部分によって全体」を表象（たとえば部分としての組物の皿が全体としての日本の和唐菜を表徴）させるために展示した品々に関しては、博覧会で受賞した品目のリストなどの様々な情報がある。

新聞には、バルセローナの博覧会に向けてアジアから送られてくる品々に関するいくつもの言及がある。品々のいくつかは、今述べた賞を後に受



図6 「日本の建築の展示場」 La Ilustración Española y Americana, 22 de diciembre de 1886, Pág. 393.

賞している。展示会に先行して新聞で報道がなされているのは、これらの品々の到着に対する一定の期待感の表わではないだろうか。すでに年初から、具体的には1月7日に、日本からの出荷を伝えている。「我が博覧会に出品される予定の品々が12月末に日本で船積みされ、この市に向けて出航した。荷箱の数は50を超える。」<sup>31</sup>少し後の3月には、展覧会に出品される品々を含んだ400以上の箱の到着を伝えているが<sup>32</sup>、それぞれ別口で送られてきたので、到着日はまちまちだった。このようにして、フレイビシ・タバコ会社が展覧会に出品する日本からの品々を蒸気船メルセデス女王号（マドリン・フレイビシ船）で搬送したのである。「昨日我が市の港にマドリンの蒸気船メルセデス女王号が入港し、フレイビシ・タバコ行政局が発送した日本の品々が梱包された171箱が到着した。」<sup>33</sup>新聞が報じている荷箱の数が621もの多さ（異なる数字ではなからうか）であることから、日本の存在は相当なものであつたか、あるいは博覧会の審判員によるコンクール最後の授与されたメダルの数を考えれば、少なくとも一定の存在感を示していたと推測される。メダルには金、銀、銅の三つのランクがあり、受賞者の全てが新聞で公表された<sup>34</sup>。

「金メダル」を受賞したのは、水産局（贈られた銅と水産物の銅）、日本の竹筴（様々な製品）、ヒロキ（紙製された銅）、キルダ・ゴン・カジーナ（陶器）、日本政府（陶器）、フカバ（陶器）、コマ（陶器）、キリン・ドセボ・カイサ（陶器の花瓶）、ヤスタ（陶器）、イイダ・シンイチ（陶器）、イトウ・コアセモン（銅）、カネタ（陶器）、ヨネザワ（銅）、銀メダルを受賞したのは、農商務省の水産局（銅）、ミタニ・ベンジロウ（陶器）、モリシタ・ツネジロウ（竹製品）、ナカムラ・チオジロウ（陶器の品が埋め込まれていない）、ウラガエ・コタロウ（陶器）、クワムラ・マタスケ（陶器）、ミカミ・イセモン（エナメル仕上げの陶器）、ミチヤ・ヤヒチ（陶器）、ラウモト・ヒデオ（陶器）、ジェルカハ（銅）、イノ・セインシャルハ（銅）、イナカワ・キヒチ（銅）、イシ・イノウエ・リエモン（竹筒）、イロ・コザエモン（銅）、テク・ツネサワロウ（日本銅）。最後に、銅メダルを受賞したのは、農務局（銅と鯉の油）、水産局（贈られた銅と水産物の銅）、ダノ・ジラサエモン（銅）、ナカムラ・ギニオ（贈られた銅）、ヨシダ・シンイチ（動物）、フジモト（動物と銅）、ヒロタ（陶器）、ヨシカワ（銅）。

全ての品々は日本政府の官公庁のもとに21のグループに分類された。

これらのうちの最初のものは、農商務省が担当している。すなわち瓶上の鯉とニンシンの油、魚の製品と道具、鳥の刺繍（…）である。次に鯉の油は内務省が担当するグループで、建設局が作成した写真パネル、地図（…）である。土木局は、象牙を彫り込んだ木製の額縁、漆塗り器木細工製の家具、漆塗りの花札箱など、多岐にわたる品々を紹介する。大蔵省は、朱の瓶、墨、あらゆる使用目的に合わせた紙の標本（…）である。文部省は、日本の教育に関する本と情報—あるものは西洋風に—や、生徒が作った物理の器具、写真パネル（…）を紹介する。地理局は、大気現象の記録や1885年の日本の地震記録、カラー写真のアルバムなどを紹介する。<sup>35</sup>

要するに、日本は、国の様々な産物を表徴する極めて多様な品々を展示したのである。しかし農産物が紹介した品々（醤油、米の精米、米の糠、日本酒やパンナ、ぶどう、ベルモットの酢、油を絞るためのアラナラの酢、包丁、小刀、砥石、洗濯や家庭のための用道具、白と赤の紙幣）を、ラ・パンダアルデニアが報じたスペインと日本の通商に関する情報を突き合わせてみると、博覧会の出展品のうちで輸入されていたことが確認できるのは「粗なしの米」だけである。新聞によると、それは361,765ペセタで輸入されていた<sup>35</sup>。米は、博覧会以前にバルセロナ市で知られていた唯一の日本の産品であるようだ。先ほど本稿で述べたように、両国間の直接的な交易は歴敵であったが、このことは第三国経由での日本の産品の取引が存在しなかったということの意味するものではない。おそらくはそのような取引はなされていたであろう。スペインの関税総局が1882年度の日本からの輸入製品について実施した調査を見ると<sup>37</sup>、輸入総額は15725ペセタで、その内訳は、「外国産」による輸入が10346ペセタ、「(スペインの)国産」による輸入が1725ペセタ、そして最後に「陸地から」到着した品々——おそらくはフランス国境経由で輸入された日本製品のことを指しているのである——が3654ペセタになる<sup>38</sup>。日本が出品したその他の製品は、もし定期的に輸入していたものでなければ未知の製品であり、それゆえバルセロナの博覧会において目新しいものだった。博覧会の審判員によってこれほど多くのメダルの授与されたには、こうした要因が影響していたのかもしれない。

### 3. 博覧会において人々が抱いた日本人のイメージ

ここまででは、1888年のバルセロナにおいて日本のことがどれだけ知られていたか、そして万国博覧会の会場施設全体に占める日本の存在がどれほどのものであったかについて論じてきた。けれども博覧会にいた日本人についてのより身近な認識については、何を語る事ができるだろうか。

日本から来た人々についてのニュースは、万国博覧会の始まる4月以前にすでに報じられていた。

地域情報。博覧会での日本の展示場を設けるためにこの市にやって来た(…)三人が、昨日我が市の通りにおいて人々の注目を集めた。かかる者たちは豪華絢爛な装束を身に纏っていた。<sup>39</sup>

一ヶ月ほど後に、同じ新聞は次のように報じている。

地域情報。博覧会のためにこの大都市にやってきて帝國日本の会場準備をしている日本人数人に付きまといつて迷惑をかけている人々の態度について、地元新聞が苦言を呈し続けている。<sup>40</sup>

この時代のバルセロナにおける日本の受け止められ方に関する地図を作成しようとするとき、こうしたニュースが役に立つ。「豪華絢爛な装束」を纏った三人の存在が与えたインパクトの大きさについて想像してみよう。そのインパクトたるや、彼らに「付きまといつて迷惑をかける」人々のことが、新聞の「地域情報」において非難されるほどのものだったのである。博覧会の会場設置のためにやって来た日本人は好奇心を煽り、別世界からやって来た彼らの身体的特徴の珍しきゆえに、冷かしの対象となったのかもしれない。もしくはただ単に、この時代のこの都市における標準的な身なりとは異なる服装をしていたために注目を集めただけだった、というのが真相に近いかもしれない。念頭に置かなければならないのは、先に言及した日本政府の統計によると、1888年頃にヨーロッパに住んでいた日本人の合計が1328人であったということである。バルセロナに日本人が住んでいたかどうかはわからないが、これらの来訪者が集めたことから判断すると、当時は日本人を見かけることが稀であったと言えるだろう。

日本人に対する人々の接し方が強められたものではなかったとしても、コンクールに出展された日本の品々に対する見方はそうではなかった。

(…) ひきしに出るされた、あるいは柱と柱を結んだ船から垂らした結びきの旗打。用いられた木のまきとその自然な色が、かりそめの建物の外観に待も「われぬ魅力を与えており、華麗、精妙、優雅で、繊細な色彩の出展品そのものに最も相応しく、かつ調和している。…これらとともに、日本人用の菓子の扇子を配っている。<sup>41</sup>

おわかりいただけるように、出展品は「華麗、精妙、優雅」と形容されているのである。こうした見方は「買輸入のための紙面」の執筆者であるホセフ・アゾル・デ・コリヤードとも一致している。彼女はスタイルとモードに関する記事において、コンクールの出展品について次のように述べている。

中国と日本は、その典型的な儀式の範囲内で、我が博覧会の広大な敷地の中から、ヨーロッパの住まいの植装な部屋を引き立てるのにふさわしい数々の品を提供する。とりわけ刺繍された屏風は、意匠を要する素晴らしい仕事である。それほど原価が高くなく、値段も比較的安価であることから、刺繍に満ちた展示場では数限りない逸品を選択することができる。その逸品を我々の家に置くことで、居住空間に芸術的威容を付け加えることになる。このコスモポリタンな優雅さこそは、近代という運動を突き動かしている唯一の精神なのである。<sup>42</sup>

以上の全てが示唆しているのは、潮のほとりにある柱松製の小さな展示場が、バルセロナ市のアチナルジョアの住宅装飾のインスピレーションの源となり、礎となったことである。ホセフ・アゾル・デ・コリヤードは、そこに展示された作品のことを「コスモポリタンな優

雅さ」と評し、「近代という時代を突き動かしている唯一の精神」が体现されたものとしてとらえた。このような主張は、19世紀末のヨーロッパにおけるジャポニスムの強烈な存在を裏付けているものである。本稿の冒頭でも述べたように、ジャポニスムの影響は様々な芸術の中に現れたが、最も重要な役割を果たしたのは装束師の分野であった。

ここ数年、我々が装束の分野において、嗜好の深遠な変化に立ち会っていることは確かである。織物装束や陶芸の方法において、あるいは絵画においてさえ、我々の中に新しい関心が生れ現れている。解放運動のための一報名状しがたい不分明な要素であり、その大部分は日本に由来しているのである。<sup>43</sup>

ラ・パンダアルデアは、バルセロナ博覧会の閉幕の差し迫る1888年9月20日木曜日付の紙面に、中国と日本の品々を展示する施設についての寸評を載せている<sup>44</sup>。実際には、それは街中にある普通の店に過ぎなかつた。見かけはたいした店ではないのだが、新聞に載り、博覧会では日本の展示品の「補セールが「ミカド」と称するこの店で行われると告知された事実は強調されるべきだろう<sup>45</sup>。博覧会会場の外部に、そして博覧会の閉幕直前に新たに日本製品の販売所が設けられたということは、東洋の手工業製品が、この時代のバルセロナにおいて購買者層を見出したということを意味する。この店で行われていたのが博覧会出品品の「補セールだったにせよ、同じ種類の商品販売を継続することができたであろう事実からは、日本が万国博覧会に参加して以降、この市においてこの類の製品が日常的にどの程度知られ、入手可能であつたかについての一端を伺うことができる。

日刊紙ラ・パンダアルデアは、この店について報じている唯一のメディアではなかつた。風刺雑誌「ラ・エヌケーリヤ・ダ・ラ・トラウチヤ」は、趣方に、東方同伴で日本の店を訪れないよう、そして訪問の代償は高くつくであろうと警告している。

親愛なる読者へ。もし行が結婚しているのなら、為になる助言を聞きましたませ。君の夫人を連れて日本の会場を訪れ、火傷でも負う事のないよう気をつけたまえ。もし訪問でもしよものなら高い代償を払うことになるだろう。そこには神様もお喜びになるような良い品がたぐさんある、いやもつと正確に言えば、仏様も喜ぶような良い品がたぐさんあるのだから。それぞれの品にはつきりと値段が表示されているから、誘惑には耐えられまい。そして神様どうか、ご夫人が嫉妬していて、どうしても洋服が買いたくなるなんという事になりませぬように。そしてご夫人は机上のものに恋してしまい、2000ペセタのはした金を支払ってやらねばその馬を逃れることはできない。また、入り口の両側で買取りをしている青銅の武士に惚れることもあるかもしれない。その武士の前では、農民が思わずこっぴどく叱られた。見ておくれ、なんて醜い聖ミカエルなんだ!<sup>46</sup>

ここで引用した文章に添えられた図版【図5】の中に、例の雑誌の挿話で言及されている「醜い聖ミカエル」の特徴を見ることが出来る。そして我々は、未知なるものを描写する際に民衆的想像力がどのように用いられるかを知ることが出来るだろう。「ラ・エヌケーリヤ・ダ・ラ・トラウチヤ」の別の号に掲載された図版【図4】に目を向けると、展示場を支えている柱の背後にそうした人形の一つを見つけることができる。図版の説明文は展示場についてこう記述している。「武士の装いをした人形によって警護された……美しい木製の日本人の家」おそらくそこに

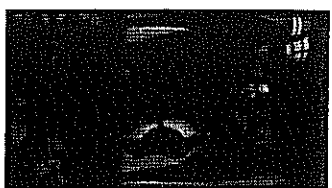


図5 「博覧会めぐり」、聖堂。日本 J La esquila de la Torralta, Barcelona, 23 de junio de 1888. 大天使ミカエル、1525年頃、パレスナフ奥付画。油彩、縦、308 x 170 cm. 登録番号 449 (右)

描かれているのは日本製の武器を身に纏ったマネキンだったのであるうが、それにしても風刺雑誌の記者が、天上の軍隊の長であり教会の守護者である大天使聖ミカエルというイメージに訴えていることは面白い。ミカエルは何よりもまず軍隊の聖人であり、西洋宗教の図像学においては、騎士や軍士にかかわりのある全ての職業の守護聖人である（兵隊に由来するのは、ミカエルが死者の案内役であり、最後の審判の日に魂の重さを計るからである）。聖のサムライをあたかも大天使ミカエルであるかのように表象することは、他文化を受容する際に未知なるものを自文化に置き換えることの良い例であり、いかに当時のバルセロナにおいて日本のことが知られていたかが分かる手がかかりとなる。

最後に、クリストフナー・コロナス記念碑の落成にあたって行われた興味深い祝事について論じることとする。この建造物が今日に到るまで同じ場所であり、市の観光名物として思い浮かぶもの一つであることも考慮に入れる。この記念碑の計画は万国博覧会開催の6年前に遡るが、資金不足によって何度となく仕事が中断したために<sup>47</sup>、仕事が始まったのは1888年1月2日になつてからであつた（これは「祝祭期」がバルセロナで引き起こした危機についてのさらなる証拠である）。記念碑の落成式は1888年6月1日に行われたが、5月初めの報道によると、万国博覧会の祝典委員会と市役所の責任者は「歴史的パレード」を計画していた。

博覧会期間中に催される見世物の一つがパレードである。その指揮はデザイナーのドン・ホセ・ルイス・ベリセルに委ねられた（…）。パレードにはヨーロッパ、アジア、アメリカ、オセアニアを表象する五つの山車が出ることになっている。この五つに続いてスペインを表象する小さな山車が貴婦人を上に乗せて登場する（…）。<sup>48</sup>

記念碑の落成式に合わせて6月初めに行われるはずだったパレードは、10月に延期された。

(…) 今日、新世界の発見者を記念する歴史的行進は挙行されない。建設委員会が足場を取り外して記念碑を市役所に公式に引き渡すまで、行進は延期される。それがいつになるかはわからない。しかし間違いなく今日の午後には彫像が開陳され、記念碑の設置は完了する。<sup>49</sup>

パレードは、博覧会プログラムの中の「よそ者や外国人にバルセローナへの来訪を促進するための手段」<sup>50</sup>に含まれるほどの目玉企画だったようである。このことは、パレードが訪問者の注意を引くほどの大きな企画とみなされていたことを意味する。パレードは、開催日をめぐる論争を含めてそれに関する記事が1月から10月までの新聞に何回となく掲載されるほどに待ち望まれた行事だったのである。ラ・パンダアルデアの記者は、市役所が新世界発見の日にあたる10月12日についてパレードを挙行したことを得意げに記している。

我々が望んだように事が運ぶしかなかったのではないだろうか。不朽の名声を手にしたあのジェノバ人が夢にまで見た土地に辿り着いてから396年を記念する祝祭に、コロニアに捧げる歴史的なパレードを挙行しない手はあるまい……。新聞では12日にパレードが執り行われると報じられているのだから、ラ・パンダアルデアの提案が考慮されたということである。(…)。<sup>51</sup>

同じ記事には、「パレードの序列」とその内容が、アジアの例について詳述されている。

アジアの旗を掲げたインド人を先頭に、インド人、ペルシャ人、セイロン人、ベンガル人、興担ぎのインド人、中国人、興担ぎの中国人、日本人、二人の興担ぎ、30の松明と提灯、馬車「アジア」、ボンベイ原住民の騎馬兵、築壘隊。<sup>52</sup>

おわかりいただけるように「日本人」と言われてはいないものの、パレードに参加するその人たちが日本から来たかどうかについては詳らかにされていない。結局、パレードは10月8日と19日の二度にわたって行われた。第一回目に関してはパレードの構成員についての詳細な記述が存在するので、アジアに関する部分をここに再録する。

(…) 大きな羽の扇子を持った二人の少年、提灯を持った二人の日本人、自国の国旗を持った一人の日本人、徒歩の二人の日本人と提灯を持った二人の日本人、興を担ぐ四人の男とそれに乗っている一人の女性と提灯持ちの二人の日本人、徒歩の四人と二人の提灯持ちの日本人と江戸の船人を乗せた大輿、提灯持ちの二人の日本人と提灯持ちの二人の中国人と中国の国旗を持った一人の中国人、馬に乗った官吏と二人の随行人、四人の男に連れ添われた麗人女性、一人の中国人遊園役者、提灯持ちの二人の中国人、コーチナの国旗を

持った人が一人、提灯持ちの二人の中国人、一人の中国人が乗った大輿と八人の担ぎ手、提灯持ちの一人の中国人、アジアの品々や旗物で装飾した山車——その輿には日本製の天蓋らしきもの下に大型の中国椅子が据えられている——、ボンベイの八人の騎馬兵、小旗を持った一人の中国人、二人の女性、二人の少女、中華帝国の軍楽隊。<sup>53</sup>

記者の詳細な描写からは、パレードに参加した日本人が真正正統の日本人であるように思われるが、パレードの不備を指摘した翌日の記事によって、それが道化芝居であったことがわかる。

(…) パレードの指揮者は役者劇に、仮装行列ではないのだから、自分たちの風景に十分に注意を払い、大きな演技を避け、できるだけ儼然とした態度で振舞うように演技指導を徹底すべきである。それが出来たら次には扮装しない人を二輪車に乗せたいか、あるいは少なくとも豪華で芸術的で華麗なパレードにふさわしい出で立ちをさせなければならぬ。<sup>54</sup>

10月28日付のラ・パンダアルデアは、一面でコロニアを記念するパレードを取り上げ、山車のデッサンを出載している【図7がアジアの部分】。新聞に載っている数々の記事が示しているように、パレードは、バルセローナ市の政治的要人だけでなく、民衆が参加したという意味において大成功を収めた。しかし我々にとつて重要だと思われるのは、日本を表象する旗、すなわち旗、提灯持ちの男、(江戸の船人)を乗せた手運びの大輿、である。この言わば「パフォーマンス」は、例られた日本人のイメージを分析するための素材を提供してくれる。まず第一に、この人気を博したパレードを、万国博覧会の展示物と比較することができ、この場合、提灯は、シウダデーラ公園の湖のほとりにあるパビリオン45の提灯と関連付けることができる。また江戸の船人がそうであるように、日本を表象する人物の身なりにも一致があるように思われる。要するに、一つの文化の全体が一つの要素——旗、提灯、輿に担がれた夫人——に還元されているのである。

一見したところ、このパレードは大々的な民族展示会であり、当時地球上に棲息した「人種」に関する別種の類型学と当時みなされていた展示会の一環であったかのようである。しかしその結果は、厳密な見本にはほど遠い。第一回目的のパレードの後にラ・パンダアルデアに掲載された推薦記事を別にすれば、私はこの行事に関する意見を見つけることが出来なかった。このパレードとバルセローナの博覧会の関連は、そのほとんどが万国博覧会において行われた「人間動物園」にあるのかもしれない。他人種の人々をその出身国の居住環境を再現したパビリオンに展示するというこの種の類型は、大勢の観客を集めてい

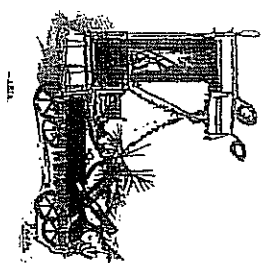


図7 1888年10月28日(日)付のラ・パンダアルデアの一面に掲載された「アジア」の図像



た。この見世物は、「他者」に対する西洋の幻想や不安にかなりの程度応えていた。これらの「人間動物園」は、その当時いまだ形成途上にあつた人種に関する意識を具現化した。個人は、あたかも動物であるかのように会場内に陳列された。その理由は、当時「他者」を示すことは自己を確立するために、つまり「他者」の陳列は西洋が列強として世界の他地域に対して優位性を誇示するために必要不可欠であつたからである。「他者」とは「異なる者」「奇異な者」「未開人」……であつたが、バルセローナの場合はパレードであり、しかも彼らは当の表徴されている国から来た人々ではなかつた。それゆゑ観覧者を用いて世界の様々な地域をアフレゴリーとして紹介したお祭りの展示に過ぎなかつたのであり、フランスの博覧会における「馴化園」(jardins d'acclimatation)とは何の関係もないのである。

1888年のバルセローナ博覧会は依然として聖通りの「万国」博覧会であつたため、そこにはフランスやイギリスの博覧会スタイルの「馴化園」は存在しなかつた。このようなデノオラタが建設されるようになった出発点は、1867年にパリで開催されたフランス万国博覧会である。しかしそれが定着するのは、1878年にやはりパリで開催された万国博覧会での「諸民族通り」の建設の成功と、1883年のアムステルダム植民地博覧会によつてである。この年以降、この種の展示が様々な博覧会において開催されることになるが、スペインがこのような興業に興じることはほとんどなかつた。

バルセローナの博覧会のフレイピン・タバコ会社の展示場には<sup>55</sup>、その一年前のマドリードのレチエーロ公園におけるフレイピン諸島大博覧会<sup>56</sup>と同じようにタバコの製造過程を再現するためにやつてきた真正正統のフレイピン現地人がいたものの、バルセローナの博覧会がヨーロッパの博覧会のやり方にとつた「なま」の民族誌的展示であつたとは言えない。しかし後にはこうした性格の博覧会がバルセローナにおいても行われるようになる。1897年のバルセローナマドリードにおけるフレイピン展の展示場がそれである<sup>57</sup>。

バルセローナの博覧会にいたフレイピン人は、すでに述べたように、展示物として「陳列」されていただけではなく、具体的な活動をするためにやつて来たのであつた。ヌッチという名のイタリア人が研究対象として陳列されたという事例があるにはあつた。しかしこの人は科学館において断食をし、毎日午前と午後健康状態を報告しており、科学的な興味の対象として身をさらしていたのである。また博覧会には中国人海賊に拿捕されたギリシヤ人船長と称する全身刺青の男が牢獄に近い状態で身をさらしていたようであるが、このことについての情報はほとんどない。以上が博覧会場における「他者」の陳列に関する全ての情報である。日本のパビリオンで働いていたのが真正正統の日本人であるか我々にはわからないが、いずれにせよ、バルセローナの博覧会は、植民地分割の最盛期にあたる19世紀末に行われていたような人種的地位性を示す類の展示ではなかつたようである。それゆゑパレードは、五大陸を代表しただけの大衆的な行事以上のものではないと結論できる。パレードが、その数ヶ月前に行われたアメリカ大陸発見の記念祭の落成式に合わせて企画されたものだったことも悪い出していただきたい。日本がパレードに

名を運ね、そこにおいて表徴されたということは、少なくともこの国の重要性が認められていたということである。おそろく博覧会における日本の存在もその重要性を裏付けよう。しかし表徴に用いられた類型を見る限りは、バルセローナにおいては、かの国のことはほとんど知られていなかったと言えるのである。

## [註]

- 1 HELIX, "The Industrial Exhibition of 1851" *Historical and Foreign Quarterly Review*, April de 1850 en GREENHALGH, Paul, *Ephemeral vistas: The Expositions Universelles, great exhibitions and world's fairs, 1851-1939*, Manchester: Manchester University Press, 1988, Page 27.
- 2 万国博覧会、国際博覧会、植民地博覧会、大博覧会などといったように、博覧会ごとの名称の違いはしばしば曖昧であり、それぞれに異なる博覧会をグループ分けするための相対的な基準を確立することは困難である。というのも、しばしばそれぞれの博覧会では大なり小なり同じような展示がなされているからである。おそろく固有の意味での植民地博覧会だけは、製品の出産やサービスの単一性ゆゑに例外とみなすことができよう。「ユニバーサル」の名を冠し、またそのようなものとして理解されているバルセローナの博覧会は、年次報に見ると第西番目に開催されたものである。1851>London, England Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations (London Crystal Palace), 1855>Paris, France Exposition Universelle (Paris Universal), 1867>Paris, France Exposition Universelle (Paris Universal), 1875>Santiago, Chile Exposition International de 1875, 1878>Paris, Exposition Universelle (Paris Universal), 1888>Barcelona, España, Exposición Universal de Barcelona.
- 3 1888年のパリの博覧会には「ユニバーサル」と呼ばれた。「なぜなら自然的・社会的秩序における全ての人間的知識と生産物を包摂しようとするから」、(MANDELL, Richard D., *Paris 1900*, Toronto, 1967, Page 9). しかしその一方で、博覧会はその全ての重要な国家の参加を見込んでいたため、「インターナショナル」であるともみなされた。「世紀末の思想が植民地主義を含んでいたため、キーンジョン・マテートは植民地とともに万国博覧会 (exposiciones universales) に参加した。植民地は、国家の権力と威信に不可欠な要素を成していたのである。」(TENORIO TRILLO, Mauricio, *Arbitrio de la nación moderna, México en las exposiciones universales, 1880-1930*, México: Fondo de Cultura Económica, 1998, Capítulo 1, "Francia, quién te quisiera").
- 4 Sueñe, Kim, "La presencia de Japón en la Exposición Universal de Barcelona de 1888 y su repercusión en la sociedad española finisecular", *Revista española del Pacífico*, nº5, Año V, Enero-diciembre 1995, Pages 171-194.
- 5 「産業館の逆輸入強に、南アメリカの諸共和国のセクションに隣接して、日本のセクションが位置していた。その展示場は、骨牌、磁器、絹や絨布の刺繍によって作られた見事な芸術品によってふんだんに装飾されていた。(…)中国の展示場は日本と同じ会場にあつた。しかしトルコと同様に、それは展示というよりも陳列品を搬送するためのロビーといったものであつた。

- た。] ROURE, Conrad, *Mémoires de Conrad Roure. Recueils de una lunga vida. Tomo IX. La restauració dels borbons (II). L'exposició Universal de BCN de 1888*. Josep Pich i Mitjana (ed). Vic: Ed. Eumo i Institut Universitari Jaume Vicens Vives de la UPF, 1999. Pàg. 95
- 6 Anónimo, [Le Blanc du Verney], *Le Japon artistique et littéraire*, Paris, 1879, p.18-19. Recogido en: *Le Japonisme*, Galerías Nacionales du Gran Palais, Paris: Mayo-Agosto, 1988.
- 7 TOGORES SÁNCHEZ, Luis Eugenio, "El inicio de las relaciones hispano-japonesas en la época contemporánea", *Revista española del Pacífico*, Nº 5, Año V. Enero-diciembre 1995. Pág. 27.
- 8 様々な理由から、明治時代には、密貿易的な政策を採擇することになるナショナリズムが打まれた。一方では、時代のダイナミズムとして、国際的な威信を獲得し、他の諸大國に對して力を示すための体制が必要とされた。他方では、対外的な行動を怠るようとする勢力な軍人階級の意志があつた。當該地域においてスペインの商業・軍事・海軍上のプレゼンスが弱減であつたことから、フエリピンにおけるスペイン当局、Oviedoはスペイン政府は、日本の艦隊が大平洋上のスペイン領を占領するのではないかとの懸念を抱いていた。
- 9 ELIZALDE PÉREZ-GRUESO, M<sup>te</sup> Dolores, "Japón y el sistema colonial de España en el Pacífico", *Revista española del Pacífico*, Nº 5, Año V. Enero-diciembre 1995. Págs.43 a 77.
- 10 "Nous locaux", *La Vanguardia*, miércoles 22 de febrero de 1888.
- 11 "Comercio de España con otros países", *La Vanguardia*, domingo 19 de febrero de 1888.
- 12 スペインと日本の外交・通商関係についてのより詳しい情報は、TOGORES SÁNCHEZ, Luis Eugenio, "El inicio de las relaciones hispano-japonesas en la época contemporánea", *Revista española del Pacífico*, Nº 5, Año V. Enero-diciembre 1995. Págs. 17-42 を参照されたし。
- 13 "El Imperio del Japón. PRIMERA ESTADÍSTICA OFICIAL", *La Vanguardia*, martes 21 de agosto de 1888.
- 14 「旅行者への通知、水難局は官報に次のような通知を行った。この通知を受け取った者は、當該の地図、海図、航路を訂正されたし。日本列島、瀬戸内、胡國454、船後等の栗島の南東位(A. A. N. Núm. 67400 Paris, 1888)」。 *La Vanguardia*, miércoles 4 de julio de 1888. (「提携新聞社の」通信、ロンドンからの船舶物が引き起こした物的損害は著しい。死者は500人を超え、負傷者は数知れない。火口からの噴射物が引き起こした物的損害は著しい。最新報、フドーード、10日午後8時15分(3時45分受信)。以下、配信、船後(11本)で噴火のために大惨事となっている模様。現在のところ400人の死者と1000人以上の負傷者が出ているとの情報を得ている。) *La Vanguardia*, viernes 20 de julio de 1888.
- 16 "La prensa japonesa", *La Vanguardia*, jueves 8 de marzo de 1888.
- 17 「地域情報、(…)かの向を代表する日本使節団は、フランスの定期船に搭乗して横浜を出発した。使節団を統べるのはリヨソにおけるかの領事の領事である。」 *La Vanguardia*, martes 7 de febrero de 1888.
- 18 "Noticias de la Exposición", *La Vanguardia*, 2 de marzo de 1888.
- 19 ジョゼフ・フアン・セシル・イ・メストラ。1829年バルセローナ(フ)に生まれ、1897年バルセローナで死去。1853年に建築家となる。「市民」としての地位は人権にとつての闘いの標語で1870年のバルセローナ・ソウダテラ公園ののためのコンクールで優勝した。彼の活動は

- 非難に堪わしい。なぜなら建築家としての彼のフカデミックな能力はしばしば疑問に付されたからである。助手には、彫刻家のジュアン・フロタツ、エレンス・マタラ、そして建築の学生クリストバル・カスカンとアントニ・ガウチイがいた。
- 20 "Excursions por l'exposició. Pabellons", *La esguella de la Torratxa*, 13 octubre de 1888.
- 21 Sine-luce, Kim en: "La presencia de Japon en la Exposición Universal de Barcelona e 1888 y su repercusión en la sociedad española finisecular". En la *Revista española del Pacífico*, nº5, Año V. Enero-diciembre 1995. Pág.181. から引く。
- 22 Yvart, J. *El año pasado*, Barcelona 1889. Kim en: "La presencia de Japon en la Exposición Universal de Barcelona de 1888 y su repercusión en la sociedad española finisecular". En la *Revista española del Pacífico*, nº5, Año V. Enero-diciembre 1995. Pág.180. からの引用。
- 23 FABRE, Xavier, "Exposició i espectacle. Un passeig per l'exposició cent anys després". *L'Avenc*, Nº 118, Septiembre de 1988. Dossier de la Exposición Universal de 1888. Págs. 44-47.
- 24 いくつかのカタルーニヤの主要商業都市である。
- 25 *La Vanguardia*, martes 10 de abril de 1888 (edición tarde).
- 26 "La cema en la exposición", *La Vanguardia*, domingo 27 de mayo de 1888.
- 27 フエテリ・コ・ラオラ・イ・トルムルス(カタルーニヤ、1858-1919) 経済専門家にして政治家。同じ労働改革者の総書記(1890-1902)の地位にあるときにカタルーニヤ産業の経済的復原の主張を行った。異議貿易推進の論戦を繰り、パリ印字条約(1898)の交渉には、首を代表する専門家として、フエリピンにおけるスペインの立場を保持するために派遣された。
- 28 RAHOLA, Federica の記事、"Exposición Universal, la primera impresión", *La Vanguardia*, martes 29 de mayo de 1888.
- 29 "La exposición universal", *La Vanguardia*, martes 10 de abril de 1888 (edición tarde).
- 30 *La Vanguardia*, martes 10 de abril de 1888 (edición tarde).
- 31 "Nous locaux", *La Vanguardia*, martes 7 de febrero de 1888.
- 32 「博覧会に出品される予定の品々が入った400以上の箱がこの中に到着した」 *La Vanguardia*, 5 de marzo de 1888.
- 33 *La Vanguardia*, sábado 10 de marzo de 1888.
- 34 これらのメダルは、博覧会に出展した全ての向と品に關してフランス別に公表されている(賞の発表を前倒しにしてこれらのデータを参照しやすくするために、各メダル、銀メダル、銅メダル等の賞を別々に掲載する)「ラ・パンツアルチア」、1888年11月17日(夕刊)。私は以下の日付の新聞に掲載された日本に關する全ての、及びここに報告した。1888年11月20日(木)、1888年11月21日(木)、1888年11月22日(木)、1888年11月23日(金)、1888年11月26日(日)、1888年11月29日(木)、1888年12月1日(土)、1888年12月3日(日)、1888年12月20日(木)、1888年12月24日(日)、1888年12月31日(日)。
- 35 "La Ilustración Española y Americana, 22 de diciembre de 1888", p. 291. これは Sine-luce, Kim. "La presencia de Japon en la Exposición Universal de Barcelona e 1888 y su repercusión en la sociedad española finisecular". En la *Revista española del Pacífico*, nº5, Año V. Enero-diciembre 1995. の付録1に収録されている。